



## 多様性がある強い集団を目指す

私事で恐縮です。小学校の教師でありながら、いつも申し訳ないなあと思うのですが、虫が苦手です…虫が目の前にいるだけで、非論理的な人間に落ち果ててしまいます…朝から、子どもたちが（理科や生活科）学習の中で発見した素晴らしい生物の神秘をおすそ分けしようと、ダンゴムシやカマキリ、チョウやバッタを私のところへ持ってきてくれるのです。冷や汗をかきながらも、そんな子どもたちは私とは違う豊かな人生を送っているのだらうと、うらやましくもあります。（表情には出しませんが、もちろん虫に恐怖しています。こればかりはどうにもならないなあ）

人間は、一人として同じ人はいない。

趣味も、好き嫌いも、感情もなに一つとっても同じ人はいません。そんな時、以前国語の教科書にも紹介してあった、生物学者の鷲谷いづみさんが書いた文章を思い出します。

植物は、常に突然変異を起こし、できるだけ多様な状態を保とうとするそうです。しかし、人間は鑑賞を目的にしているのです、同じものを作ろうとします。代表的なものがチューリップ。球根は“クローン”だそうで、同じ遺伝子を持っているので、ほぼ同じような色や形態を示す。鑑賞には向いていますね。それを知ったある地域では、同じ色で管理もしやすいサクラソウを一面に敷き詰めた平原づくりを、観光スポットの目玉として計画しました。春に咲くサクラソウが一面にピンクに広がる草原は、まさに壮観、ばえること請け合いですね。

さて、その草原はどうなったか。植え付けた直後、小さな気候変化が起きていました。今年、ちょっと暑いなあ、くらいの変化です。なんと、この平原はその小さな気候変化によって、絶滅をしてしまったというのです。もちろん、ここ以外のサクラソウにも多少の被害はあったようですが、絶滅したところはここだけ。

このような事例は、植物界ではよくあることだそうです。“同じものばかりが群生する場所での不可解な絶滅”。実は、これらの絶滅は同種の身を育てること、言い換えると生物多様性を担保していないことが直接の原因になっていることが多い、と鷲谷さんは述べます。

翻って、われわれ人間世界を見てみると、やはり多様な人々が集うことで集団そのものが強くなる例はたくさん見られます。それだけにとどまらず、多様な人々との出会いと対話によって、個人の学びも深まりそれぞれ一人一人が大きな成長を遂げる。よいことだらけです。

ただ、人は自分と違う人や未経験のことやモノについて理解することが難しい生き物だといわれています。歴史的にみても、言葉や外見、考え方の違いなどによる差別や排除、ひどいときには戦争までも引き起こしてきた人類は、今一度、多様性ということについて理念だけではなく、多様性を認める方法まで考え抜く必要があるのではないか、と思います。

今、榆木小学校は人権旬間の真っ最中です。いつもよりちょっと意識して、お隣の私とは違うお友達に思いを馳せる時間を大切にしてほしいと願っています。